

ば、それは文化史學に對する理解の不足を示すことに他ならない。何故なら前者は後者の中に包攝され、更にそれは文化史學的立場の中にその形を崩す事なくそのまゝ攝取されて行くものと考えられるからである。即ち美術史的現象の文化史學的認識は美術史學的理解の外に並行して行われ得るものではなく、美術史學的理解の終つた所から始まるべきものであるからである。尙言わば文化史學家は美術史家の純様式的な方法をば美術史研究不可缺の前提とするものである。かくてこそ文化史學は美術史的研究の遺産を繼承しつゝ美術史的現象の正しい歴史的理解の可能性を原理的に保證し得るものとなるのである。

かように考え來る時、著者は餘りにも既に美術史學的常識に耽溺して其の埒内を彷徨する事に馴れ過ぎた観がある。従つて本書に載せられた他の五つの論文は著者の藝術的直觀力の鋭さを誘示して居るにも拘らず、歴史的理解に於いては必ずしも完全でないのは、著者の研究が充分に行届かなかつた爲ではなく、美術史學的立場を包攝した文化史學的立場に立つ事なく、美術史學と文化史學とを相

對立するものと誤解し、兩者の中間に著者の所謂精神史的立場を見出そうとした態度そのものから生じて來たものゝように思われる。

著者の立場の紹介とそれへの批判を五つの論文について具體的に實證する事が筆者に課せられた本來の課題であるであらう。然し此等の論文は餘りにも多くの問題を含み、其の問題を逐一取り上げる事は筆者に與えられた紙面の制限がこれを許さない。故に筆者は今回たゞ、美術史的對象への「眞實なる直觀的體驗と學的な把握」を前提し(六二、五三頁)、「解釋學的理解の深さを絶對的に先取しなければならぬ」(五六頁)と説く著者の美術史研究の態度が、どの一篇にも看取せられる事、そして其等の諸論文の悉くが國史學界に稀れな此の若き奇才の彫身鏤骨の努力によつて編み上げられた妖嬈な花東である事を申述べるに止め度いと思つた。

筆者の義務の不履行に對して著者の御寛恕を願ふと共に、本書の御清讀を大方諸賢に對して切に御奨めしたいと思つたのである。

(B 6 版二五八頁、白井書房昭和二十五年一月刊、二五〇四)——石田一良——

Die Frankfurter Altstadt, eine
historisch-geographische Studie
von Karl Nahrung (Rhein-Mainische
Forschungen 1949, Heft 27)

現代史學の漸動向が、F・リヒトゲの「獨地域の初期中世農制」(一九三七年)にみるごとく、特殊の地方史研究による一般史の再編成、あるいは歴史の地域的變位や類型的把握にあることは、歴史學の側からする地理學的方法への接近として注目すべきものである。集落地理學や景観變遷史的研究が、既に史學に對して實のり豊かな影響を與えた最もよき例は、ドイツ史學家A・D・フシュの古代乃至中世の農村社會の理論的究明に寄與したシニリユーターヤググラートマンの歴史地理學にみる事が出来る。本書はかゝる系譜につながるものとして、戦後ドイツの歴史地理學の傾向を端的に物語つてゐる。

著者カール・ナールングの所屬する“Die Rhein-Mainische Forschungen”は、Frankfurt・アム・マイン大學地理學研究

所の一部門であつて、一九二五年、W・ペー
ルマン教授によつて創設されたもので、この
地方の郷土科學の樹立を目的としたものであ
るが、この機關が、該地域の地理的・經濟的
統一性の究明・國土計画に關する價值高き研
究を試みたことは特筆されてよい。附屬圖書
館は、二〇〇冊の書籍と四七〇卷の雜誌及
び統計書を所蔵していたが、一九四四年の空
襲のため灰燼に歸した。いわば、本書はかゝ
る灰燼の中から飛立つたフェニクスの一羽で
ある。

ナールガングは、既に一九三二年、「初期
中世に於けるフランクフルトの成立及び發達
に關する歴史地理學的研究」を發表し、考古
學・集落地理學及び文獻的證據による綜合科
學的方法による新たなメトードを斯學に措定
するところがあつたが、その後の實地調査や
發掘物の研究を更にとり入れて、以前の結論
に修正を加えたのが本書である。

まず第一章「景觀像・地形・地質」に於い
ては、メイン河低地が、先史時代には稠密な
樹林繁き小島をなしていたのに引きかえ、ブ
ラウバッハ北方と西方に擴がつた砂地及びレ

ーデルベルグとザクセンホイゼルベルグの石
灰質土壤地域では、軽い樹林をなしており、
ニダ河西方のレーン地帯には全く森林がな
く、先史人類の集落形成に適した場所であつ
たことを、花粉分析や遺跡に即して結論づけ
ると共に、これを圖示することによつて、グ
ラートマンの所謂「ステツペン理論」への接
近を試みている。また、メイン河畔と河中出
土の遺物及び墓塚群の方向によつて、ザンド
ホフとゲルベンミュール近傍の淺瀬が、先史
時代に渡渉地點として選ばれたこと等をも推
定してゐる。

第二章では、フランクフルトの集落として
の始源は、少數の遺物破片によつてゲルマン
集落に遡るが、この地方の組織的な開拓は、
ローマの城壘構築と共に始まることを述べ、
ローマの城の位置及びその復原を試みづら
い。

第三章「民族移動とフランク族の地名」で
は、ローマ文化の崩壞の上に現れた *germanisch-
romänisch-gemänisch* な混合文化のトリ
ーガーであるアレマン族は、たしかに此の地
域に支配的ではあつたが、その殘存墳墓は少

數であり、固有の建築物も殆んどなく、ブラウ
ンハイム附近の家屋群によると、當時ローマ
風の建物が廣く利用されていたことが明らか
であり、物質文化の上から、ローマとゲルマ
ンの連續性を究明し、更にその後につゞくフ
ランク族のライン地方からチューリンゲン・
シュワーパーンへの勢力圏擴大が、古いローマ
道路を媒介としたこと、フランク族の列狀墳
墓から推定して、六世紀に於けるその植民
が、メロヴィンガ王朝の勢力を背景に、ライ
ン左岸地方から下メイン地方に顯著であるこ
と、且つその集落を示す“*heim*”のついた
地名が、以前のローマの城壘の地點と合致す
ること、その *heim* 地名が、大抵、創始者
の名称をつけてゐること (Brunnigeshain
= *Prunnigeshain* 七五二、*Borchelshain*
= *Borkeshain* 七九五、*Rudlinheim* =
Rudelheim 七八八等) があげられてゐる。
東西の中世農村乃至莊園形體が、幾多ニュー
ンスの相違を許めながらも、なお其處に強い
類似性の存することを、この邊の行文から汲
みとることは、我々の責務でもあらう。

第四章「フィスクス・フランクフルト」

フィスクス (Fiskus) は、王の統治・處分権を有する占有地の内部にあつて、その處理と利用を特別に留保された土地 (ad opus regis) であり、フィスクス・ヴィースバーデン、フィスクス・トリプフルと並んで、フィスクス・フランクフルトが、八一七年八月四日の文獻に初めて認められる。一九の村落の複合よりなるこのフィスクスの範圍及び細區分を、自然的基礎との關係から考察すると共に、内部の教會財産・貴族と農民の個人財産・マルクをもつた自由村落等の相互關係及び財産の寺院領への推移等について言及してゐる。

第五章では、中世のマイン河渡渉點を、河底土壌の地質學的研究から考證し、六章「ロクス・フランクフルト」では、カロリング時代のフランクフルトに農業集落の存したこと、都市への萌芽はいまだみられず、ローマの廢墟上に成立したビショップ座 (Bischofsstühle) も、本来町ではなくて、禮拜堂の不規則な集合にすぎず、それを取り圍む城壁も、ローマ占有時代の古い町の城壁を利用したものであることをのべて、初期中世のこゝる

集落像は、ノイヴィードからほど遠くないグラードベツハ近傍のフランク族の村落及びネットワークラウ附近に存したカロリング朝の村落發掘その他から、極めて不規則な、プリミティブな建物から成るプランであつたと推定している。

第七・八・九章では、メロヴィンガ王朝の議事堂・七九四年の文獻に始めて記載されたカロリングガ王朝宮殿及びケーニヒスホフとケーニヒスカムプ等の位置考證を試み、第十章では、「道路網の成立」に就いて述べている。特に、カロリングガ朝時代に於けるドームヒール及びカメルリテルヒールへの道路網は、一見不規則な袋路 (Sackgasse) から出来ていたこと、中世初期の道路網が、前代のローマ道路の知識なくては理解不可能であること、而もローマ道路の詳細は、中世道路に基く進推を必要とすること等、研究操作に關しても、我々に示唆する點が大きい。

第一一・一二章では、フランクフルトの都市化に就いて述べている。即ち、一〇七年始めて Villa とよばれたフランクフルトは、

一四二二年には Oppidum の名前で出現したのであるが、村落共同體から都市共同體への推移は、極めて徐々に完遂されたのであり、王の市場は一二二七年、その庇護權は一四四〇年、始めて認められたに過ぎない。だが一二一三世紀になると、多數の教會・修道院・最古のユダヤ人區等が成立した。著者は、これらの建物及び都市形態の復原を文獻及び古地圖に加ふるに考古學的方法を駆使して試みると共に、フランクフルトの都市化を長期に亘つてはぐんだ原因を探究しようとする。抑々中世の地名研究から、フィスクス、フランクフルトよりニダ河迄、フランクローヴィンガーカロリング時代を通じて全地域に亘つて卓越した森林地帯であつたことが推定される。著者は、カロリングガ王朝治下の景觀の復原を企圖し、フランクフルトとザクセンハウゼン村の農地マルクは、當時極めて小規模であつて、北方ではシュタウフィッシュの圍境要塞に接して古い森林限界があり、西・南部では、マイン河に森林が迫つて居り、その間に存する近郊の三農地、リーデルフェルト・ニーダーフェルト・フリードベルガーフェ

ルトの位置は、下地の地質學的性質及びそれによつて制約される豊饒性によつて説明しうるのであつて、森林は砂質性の礫の多い河成段丘に横延しがちなのに對して、前二者はマイン河の氾濫原に、後者はレース及び石灰土壤に立地していることを立證した。さらに、村落間の境界形成に對して森林帯が如何に作用したか、中世後期、都市の成立發展に即して森林開發が如何なるプロセスをとつたかを追求め、マイン河北岸に於ける十三世紀以後の大規模な針葉樹林の開發によつて、新しい農地と家屋群が續々出現し、個々の三圃農法も一部では施行されるに至つたこと、また南岸地域ではホーヘンロッド村等の新開拓地が、主として葡萄畑に利用されるに至つたこと、かくして此處に、一八世紀近代の都市の成立までの停滞的なフランクフルトの體制がほぼ完了したことを叙述している。蓋し、この二章は、本論文中の自眉ともいふべく、景觀の意味を單なる集落や農地だけに限ることなく、文字通り人文自然全體に亘り、豊富な歴史地圖による説明を試みただけでなく、特にそれらを社會生活の發展に即して考察した

ところに大きい意義がある。たゞ開拓地の集落及び農地の機能が、個々のゲヴン集落やマルク共同體的規制に對して、如何に相違するかについては、遂に本書から知ることが出来なかつたのは残念である。勿論、中世後期以後の地積圖や古地圖を手がかりに、遠く中世—古代に於ける集落や農地形態を推論し、古代ヨーロッパの地域社會像を大規模に系統化したマイチェンの構想にみるごとき華やかさを、本書の如き特殊研究に望むのは無理であるが、著者の精緻にして實證的な科學的態度は、前者の如き華やかさの蔭に、ともするとつきまとい勝ちな獨斷の空虚さを片鱗すらも感ぜしめない。

最後に一五章は、「フランクフルト周邊の領土的形成の始源」と題して、まずフランクフルトが、近隣諸都市と對照的に、獨立的な都市的共同體へ發展しえたのは、ラインマイン河流域に於ける王領地の崩壞によるのは勿論であるが、元來、中部ライン地域とヴェトラウは、既に先史時代に於ける諸文化の南下北上を始めとして、あらゆる時代を通じて、南北ドイツの自然的媒介體であつた點にもよ

ることを史實的に説明し、次にカロリング時代、フルダ・ロルシュ・ヴェルツブルグ等への土地財産の寄進に伴う土地所有及び領有關係の變動に就いて述べ、最後にこの地域に於ける中世の政治地理的傾向を要約して、「ライン—マイン地方の多數の支配、主として遺産相續により制約された顯著な領土的分散、實際の勢力因子を伴わない對立的な競合は、ライン—マイン地方に於ける政治的割據の目標以外のものではない。そしてまた、現われ出でた中世の兩大國、即ち東西にクルマインツ、南北にヘッセンが存在するが、これらは王の保護下にあつた皇帝領フランクフルト地域によつて分裂している。これ實に、フランクフルトが、常にラインマイン地域の經濟的・文化的媒介點に向つて成長したことを物語つている」としてゐる。

——水津 一朗——

× × × × ×

× × × × ×